

平成21年度率先実行大賞 受賞取組概要

応募を受け付けた順に掲載

部局名		活動テーマ	グループ名	取組概要
1	農水商工部	(33)自分が変わる！漁師が変わる！地域が変わる！～カタクチワシから始まる、なかまで(仲間で・中まで)津ぎょうざ～	津農林水産商工環境事務所水産室・農水商工部マーケティング室 なかまで津ぎょうざプロジェクトチーム	津農林水産商工環境事務所水産室・農水商工部マーケティング室の職員による「なかまで津ぎょうざプロジェクトチーム」では、津地域の重要水産資源(カタクチワシ)の食用需要を増やすにあたり、津の新しい食文化「津ぎょうざ」をツールとし、若手漁業者・地域食品事業者・NPO・地域自治体・県が連携した商品開発等を行い、地域に密着した新たな水産物の食べ方提案による需要創造に取り組んだ。津まつりの会場などでの試験販売では、試作品を短時間で完売し、評価も上々であり、新たな「津ぎょうざ」として地域に広く認知された。
2	生活・文化部	(36)若い力と感性を図書館に！県立図書館学生ボランティア(通称“学ボラ”)の活動	県立図書館 スマイルプロジェクト	県立図書館では、平成19年11月に高校生・大学生による学生ボランティア(以下学ボラ)を組織し、毎月の定例会を中心に活動している。定例会では、学ボラに対する本の修理や読み聞かせなどに関する講座を実施するとともに、そうした講座を通じて学んだことを学ボラ自身が自主的に実践する企画・美装・広報といったグループ別活動を展開している。こうした活動は、これまで新聞等へ何度も取り上げられ、県外の大学の司書課程の講義で紹介されたり、他県の図書館から問い合わせがあるなど図書館の新しい取組として注目されている。また、これまでの活動の集大成として平成21年11月に企画・準備・運営のすべてを学ボラ自身で行った「学ボラまつり」を開催し、学ボラスタッフ・参加者(子ども・保護者)の双方で、「大変満足」というアンケート結果を得ている。
3	健康福祉部	(43)施設で暮らす子どもたちの“生い立ちを知る権利”を支援する～真実告知とライフストーリーワークの試み～	児童相談センター「真実告知&ライフストーリーワーク」勉強会	家族と離れて児童福祉施設で生活する子どもたちの中には、「自分が施設に来ることになった理由」や「離れて暮らす家族が今どうしているか?」といった説明が十分されていなかったり、時には親の名前さえ知らない子が想像以上に多いことが分かってきた。児童相談センターでは、「子どもたちにとっては辛い事実も多いが、『自分自身の幼い頃のことを理解することが、今の自分・将来の自分を前向きに受け入れるための最良の方法』という信念」の下に、センター内の勉強会などを通じて、子どもにとって“より安心・安全な生い立ちの伝え方”を研究・実践してきた。そうした中で、各所で蓄積されてきた実践事例をもとに、平成21年度に事例集・ノウハウ集として「実践ガイド」を作成し、児童相談センター内の希望者に配布した。
4	農水商工部	(49)固定観念を打破した粒販売ブドウ「イガいなぶどう」の考案	農業研究所 伊賀農業研究室	伊賀地域は高品質なブドウの産地であるが、「巨峰」などの高級大粒ブドウは贈答品のイメージが強く、高価なこともあり、最近では消費が低迷している。また、1990年代以降、核家族化が進み、小分けされた食品の販売が多くなる中で、房で販売されるブドウは、量的に多く、価格も高いという不利な状況がある。そんな中、偶然、房から切り離れた果粒をバックに入れて机の上に置いておいたところ、1カ月経っても見た目が変わらず、食べてみても味もほとんど変わらないことを発見した。そこで、ブドウの房を小分けすることにより、1人が消費するのに適当な量となり、価格もお手ごろになると考え、平成19年度から本年度までブドウの粒販売に向けた研究に取り組み、農業改良普及センター・JAなどと連携しながら従来の固定観念を打破した粒販売ブドウである「イガいなぶどう」が誕生した。
5	教育委員会	(57)みんなでやれば元気いっぱい!!～保護者・地域に支えられ励まされて	県立宮川高等学校	4年前、宮川高等学校は生徒指導面を含め学校経営上多くの課題を抱えていた。その原因として、学校の実態について教職員・保護者・地域住民の共通理解不足・連携不足が考えられた。そうした中で、学校理解を推進するためには、情報共有が不可欠であるという認識のもと、学校経営品質の取り組みを見直し、「学校経営の改革方針」策定から中間評価や年度末評価、アセスメントに至るまで保護者・地域住民にも積極的に係わってもらうことにした。保護者・地域住民・教職員が情報を共有し学校理解を深めることで、同じベクトルで取り組みを行うことができるようになり、現在では生徒指導上・学習指導上の課題は4年前に比べ大きく減少し、挨拶ができ学習や部活動に熱心に取り組む生徒の姿があちらこちらで見られるようになり、入学した生徒が安全で安心して学べる学校へと変わった。

部局名		活動テーマ	グループ名	取組概要
6	防災危機管理部	(63) ちょっと覗いてみたい父親の仕事、好奇心から憧れへ	防災対策室 防災航空グループ	三重県内の15消防本部から派遣されている防災航空隊員は、消防救急業務に加え、航空機を使用した空間域での活動であり、活動にかかるリスクは著しく高くなっている。そうしたリスクの中で働く隊員にとって、身近な家族や周辺地域の住民の皆さんに日々の活動内容や活動上の安心・安全体制について、理解を深めていただくことは、大いに心の支えになる。そこで、派遣されている隊員の家族や地域住民等を対象とした航空隊業務の概要説明及び実機を使用した日常的な訓練見学の機会を設け、安全への配慮等について理解を深めた。 また、防災ヘリコプターを行政目的で使用する場合、飛行時間を有効に活用するため、具体的な飛行経路が同地域内と判明した時点で、複数の関係所屬間での飛行予定を調整することなどを通じて、効率運行・経費削減にも取り組んだ。
7	政策部(津)	(127) 津の美しい海づくり～海岸一斉清掃～	「津の美しい海づくり」実行委員会事務局 津庁舎各事務所プロジェクトチーム	津県民センターでは、平成17年度には、当時の津市、河芸町、香良洲町と準備委員会、平成18年度には住民代表者、企業・団体の代表者も交えて「津の美しい海づくり」実行委員会を立ち上げ、津地域の大切な資源である海の景観を形づくってきた白砂青松の風景を蘇らせ、住民や訪れる人に「憩い」「親しむ」「楽しむ」ことのできる美しい海辺の景観を再生することを目的に、河芸地区から香良洲地区までの全長約20kmにも及ぶ海岸線の一斉清掃を毎年実施している。 県だけの取組みとせず、市町や住民と役割分担しながら、将来にわたって、円滑に活動を進める為に必要な仕組みづくりを図っている。 平成21年度の活動では、3,180名の参加を得て、回収したゴミも約11.8トンに上っている。
8	教育委員会	(160) 肢体不自由のある子どもが楽しく体を動かすための教材の開発	県立度会特別支援学校 小学部音楽グループ有志	肢体不自由のある子どもにとって、自分の思うように体を動かしたりしっかりと姿勢を保持したりすることは、なかなか難しい中、特別支援学校では、そういった子どもの体に対する配慮や支援、指導を行っているが、子どもの動きに合わせた音楽がほとんどないのが現状である。そこで、もっと、肢体不自由のある子どもたちの体の動きに合わせて、無理なく、楽しく体を動かせるような歌はできないものか、音楽の時間に体を動かしながら楽しめるような教材はできないものかとの思いから、音楽に合わせて体を動かせるようなオリジナルの歌や動きを考え、現場で実践しやすいように、30曲を収録した音楽教材「イキイキたいそう」CDブックを制作した。 700部を他の特別支援学校や幼稚園等に配布しており、実践した教員や保護者からも高い評価が寄せられている。
9	健康福祉部	(174) 福祉機器リサイクルで肢体不自由の子どもたちの生活をサポート	草の実リハビリテーションセンター 訓練課 福祉機器リサイクル委員会	車椅子や座位保持装置、歩行器などの福祉機器は、通常、福祉(一部保険)にて、規定に従い支給されるが、幼児・児童においては、身体の発育や運動能力の変化により、老朽化以前に作製の更新が認められることも少なくない。不要となった機器は、家庭で使われないまま放置されることや、中には処分(廃棄)の方法について草の実スタッフが相談を受けることもしばしばあったことから、この処分されてしまう機器を他に必要とする子どもたちに再利用できれば、療育の助けになるのではないかと考え、平成16年から福祉機器のリサイクルを行う取組みを開始した。次第に草の実の利用者の皆さんやスタッフに取組みが認知され、利用件数(提供数、再利用数)が増加し、6年間の活動で368件の機器が再利用され、子どもたちの療育等の一助となっている。
10	教育委員会	(199) 「生徒さんのために」新しい高等学校通信制課程創造への取組み	県立北星高等学校通信制課程	北星高等学校では、平成18年度から四日市高等学校通信制課程を段階的に引き継ぐとともに、生徒からのニーズ調査や先進県のベンチマーキングなどを行い、新たな通信作りを職員で議論を繰り返しながら推進し、今年度完全移行を果たした。そうした中で、日曜に通うことが困難な生徒への平日スクーリングコースの開設、乳幼児を抱えながら学ぶ意欲を持つ若い母親のためにNPOと協力しての日曜託児室の運営、秋期入学・卒業を可能にした Semester制(半期単位認定制)の導入、定時制で学ぶ生徒が併修するための柔軟な併設制の実施などの取組を進めた。 その結果、従来と比べ、学習活動をする通信制の生徒数は約270名増加、定時制からの併修生も60名を超えて増加した。また熊野市以北の三重県のほぼ全域から生徒が学ぶことを可能にした。